

マサバ

生態的特徴等

【生態】

日本周辺に広く分布し、季節により大きく回遊する。太平洋側では春から夏にかけて伊豆諸島～常磐沖を北上し、秋に道東～三陸沿岸域を南下する。冬には2歳以下の未成魚は越冬場である常磐～房総海域で過ごし、3歳以上の成魚は産卵場である伊豆諸島周辺海域へと南下し3～6月に産卵する。稚魚は動物プランクトン、幼魚以降は魚類、甲殻類を主な餌とする。寿命は7～8歳。平成25年生まれの加入により資源量が大きく増加したが、密度効果によって成長速度の低下がみられている（図1）。

【漁法と盛期】

茨城県では主にまき網によって近縁種のゴマサバとともに漁獲されるが、漁獲量はマサバの方が多い。魚群の回遊に合わせて漁船も移動し、本県沖には晩秋から春に漁場が形成される。

【利用】

青魚の代表であるマサバは、EPA・DHAなどを豊富に含む。特に秋から冬は産卵のために栄養を蓄え、脂がたっぷりのっていて美味。鮮魚のほか、缶詰、塩干品原料として利用され、近年ではアジア・アフリカ等への輸出も盛んである。県のプライドフィッシュ（冬）に選定されている。

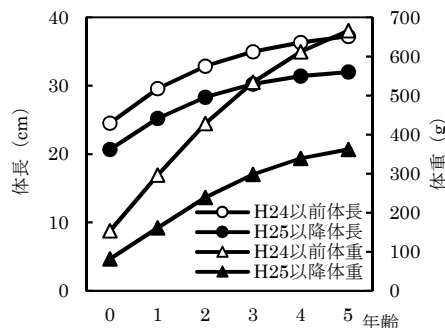


図1 マサバの成長

(H24 以前に加入した年級とH25以降に加入した年級を別示した)

資源水準は中位、動向は減少傾向

(漁獲量) S53年には97万トンを超える漁獲があったが、その後急速に減少し、H3年には5千トンとなった。H25年以降に増加し20万トン程度まで回復したが、R3年以降は減少傾向となり、R5年は2万トンとなった（図2）。

(加入量) H25、H30年に高い加入があったが、R1年以降は減少傾向となっている。

(水準と動向) 国の資源評価（R6年度）によると資源水準は「目標管理基準値を下回るが、限界管理基準値をわずかに上回る」、資源動向は「減少」とされている（図3）。

水準



(国)

動向



(国)

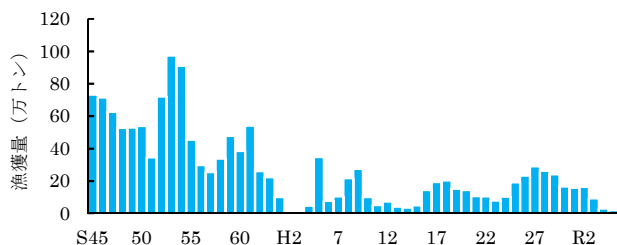


図2 マサバ漁獲量※1の推移

※1 千葉県から青森県沖で操業する北部太平洋海区大中型まき網の漁獲量。
年は漁期年（7月～翌年6月）を表す。

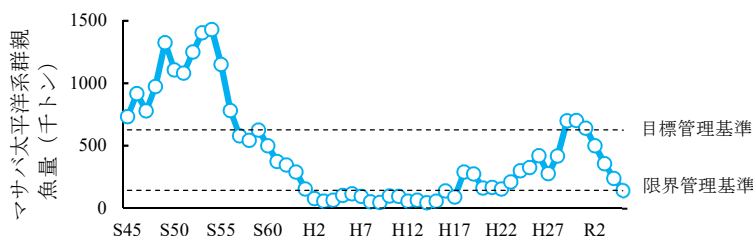


図3 マサバ太平洋系群の親魚量と管理基準値※2

※2 新たな資源管理（MSY代替値）に基づく管理基準値。

【全国の漁獲動向】

・1位は長崎県、2位は宮城県、3位は島根県。（R5 農統）

評価期間：令和5年7月～令和6年6月 更新日：令和7年3月25日